

## Dr. Johnson に捧ぐる頌讚の辞

—その二百年忌（十二月十三日）に寄せて—

### A Eulogy on Dr. Johnson

—In Memory of His Bicentenary of Death (On 13th December)—

富田 光行

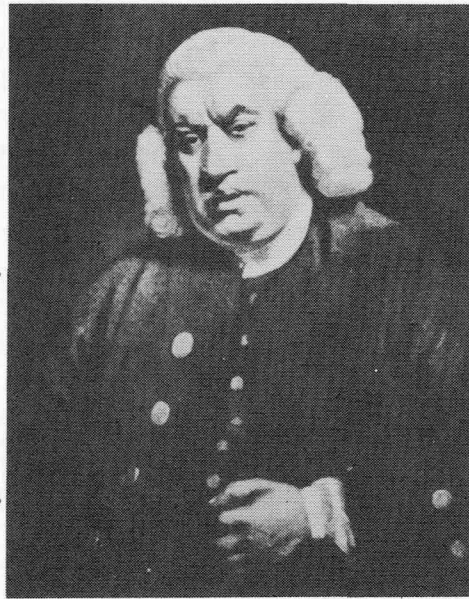
Mitsuyuki Tomita

☆

#### 緒 文

辞書といふものは、学習研究にとって、まことに有難い寄り処であるにも拘らず、その編輯者は、その仕事がかく無味乾燥に見えるが故に、彼らが詩情を持たぬ事務的な人・趣味を解さぬ木偶坊と臆測を逞うされる傾向がある。然し、わが Dr. Samuel Johnson については、想像もつかぬほど、さういふ臆測はあてはまらない。なるほど、彼は、人をして瞠目せしめるほど、世界的最高権威の辞書 A DICTIONARY OF THE ENGLISH LANGUAGE を編輯発行したばかりではなく、伝記、物語、諷刺詩、紀行文、良書の翻訳、等々にも滋味ゆたかな健筆を揮ひ、人生・文学・芸術に対する深い理解と高い熱情とを捧げて、高く人を凌いだのである。

ところで、今年ちょうど、彼がロンドンのゴフ・スクエアで、卒中に倒れ、さなきだに、天地人・三相に寒しみいる12月13日、「停止」を知らぬ「活動」の人 Johnson はつひに白玉楼中の人と化し、生前こよなく愛したロンドンの一角 Westminster 大寺院に葬られたのである。彼が学界に残した偉大なる恩恵に浴する何人も、イギリスの内外を問はず、必ずや当時を想ひ故人を偲び、深き感謝と高き称讚との一日を過すことであろう。



Johnson は、1709年 9月18日、イギリスの Lichfield に、古本屋の長子として生れた。次いで生れた弟は夭折してゐる。彼は生れながらにして病弱で、幼児瘰癧<sup>るいれき</sup>にかかり、そのため視力と聴力とを二つながら損はれた。瘰癧については、面白い逸話がある。かういふ病気は王様の手に触れれば癒るといふ信仰が広く行はれてゐたので、その母は彼が三歳の時に、はるばるとロンドンにまで連れて行き、かの女王 Anne (1665—1714) の御手に触れさせていただいたとのことである。

彼は、然しながら、成長するにつれて、体格が頑丈になり、身長肩幅共に群を抜き、今に残る肖像画の示す通りの Johnson になった。彼は見るからに、無精なところがあつたけれども、理解力と記憶力とは驚嘆に値するものであつた。子供時代から父の店頭に本を貪り読み、Lichfield Grammar School に入ると、忽ちにして頭角を現はし、成績は優秀、性格また偉大、いつしか学友の尊敬するところとなり、彼らの肩に乗せられて通学したとの頰笑ましい場面もあつたとか。

1729年、彼は Oxford 大学の Pembroke College に入学したのであるが、指導教員達が彼と面接した時、古典に関する彼の知識に、彼らは驚かされたとのことである。ここでも、いつしか幾多

の学友が彼の周囲を取り巻くところとなった。然し、在学1年余にして、学資がつかぬために、欠席も多くなり、学位も取れず、Pope (1688—1774)のMessiahをラテン訳して、著者に褒められまでしたものの、第二学年の夏にはヒポコンデリーにかかるなどして、1731年の10月に、在学3年にして、Oxfordを去らねばならなくなった。

これに追ひ打ちをかけられ、1731年冬には父の死に会い、今や自活の道を辿らねばならず、小学校の助教に就いたが、然しMarket Bosworthに於ける二・三ヶ月の後に、その地位を放棄し、職を探して、Birminghamを訪れ、そこの出版社に雑文筆者として入り、暫くの間働きはしたが、事意の如くにはならないまでも、その間、軽薄な楽天主義や一切の妥協を排して、彼は神父Lobo (Jerónimo: 1593—1678)の仏文Voyage to Abyssiniaの短縮訳(1735: Johnson 26歳)を英語で出版した。

1735年に、彼の家運はその最低なる退潮の状態にあった。然し、彼は感ずるところあって、齢46歳になるBirminghamの寡婦(呉服商)と結婚した。この時、彼は26歳であった。彼女は、彼のところへ、800ポンドをもって来たが、その一部は或る弁護士の破産状態で失われてしまったらしい。彼は、またLichfieldに近いEdial Hallで、小学校の経営を企て試みたが、然しそれも二・三ヶ月で、失敗に終わった。

1737年、一つの悲劇に遭い、そのポケットには二ペンス・半ペニーを持って、Edial当時の生徒David Garrickをつれて、単身ロンドンに登り、その年おそくなって、夫人を呼び寄せた。彼が生計を立てるために、恐るべき奮闘をしたことは確かである。彼は素晴らしい勇気をもって、すべてに耐へたのである。その間、きびしい境遇にも拘らず、彼は当代に於ける傑出した作家となりつつあって、その著作によりも以上の物事——彼の人柄に於ける偉力と高貴とに帰すべき権勢をすでに獲得しつつあった。

その翌る年・1738年、彼はかのGentleman's Magazine〔創刊者はEdward Care (1691—1754): 1731年初刊, 1907年に廃刊〕に所属する正規の寄稿者となり、1740年11月から1743年2月まで、彼はThe Senate of Lilliputといふ表題の下

に発行される議会の論争報告書を書いた。この同じ年、最初の教訓詩Juvenalの改作をロンドンで発行したが、そのいはゆる行間には、彼が蒙ってゐたその苛酷な体験に関する哀れな物語が読まれるかも知れない。それは成功であって、Popeの親しみ深い関心を彼に勝ち得さしめることが出来た。

これより二年後の1742年、彼はHarleian Libraryのcatalogueに採用され、それから二年後の1744年に、彼のLife of Richard Savage、次いでLives of the Poetsが現れ、この後者が直に彼を有名にならしめた。それで、彼の声誉が非常に健全となったので、1747年に数軒のロンドン書店がA Dictionary of the English Languageについて、彼と契約を結ぶことになった。〔然し、本書は1755年4月までは出版されなかった。〕

然し、彼の文筆生活は停止することなく、1749年には、人間の野心大望を痛罵するThe Vanity of Human Wishesを、1750年3月にはThe Rambler〔毎週二回発行の新聞で、例のSpectator (1711—12)に準拠したもので、1752年3月まで毎週火曜日と土曜日とに発行された〕を、発刊したが、更に彼は例のAdventurer (J. Hawkesworth編: 1752—54)に寄稿(1753—4)し、1756年に例のLiterary Magazineの編輯を始めた。これより2年後の1758年4月、また、別な定期刊行誌Idlerを開始したが、これは1760年4月まで、満2年間毎週発行された。また、1759年、彼は教訓小説Rasselas, Price of Abyssiniaを、前述のLobo神父によるA Voyage to Abyssinia〔フランス語版〕から思ひついて、毎週幾夕かに発行したのであるが、これは好評を博するものであった。

ところが、自他共に予想もしなかったことであらうが、1762年に、文学と学問とに対するその功績を認められ、彼はLord Bute (John Stuart, third Earl: 1713—92)から300ポンドの年金を下賜され、そしてこの時から彼の文学独裁権が始まり、これが1764年に例のLiterary Clubの創立によって確定された。その翌る年・1765年にはShakespeareに関する彼の編輯が8巻になって現れた。そのtextは時として過失の部分がある。然し、彼は最初のfolio版(1623)の価値を認め、それで彼は聡明な解説には何ら優越者をもたな

い。全体から見て、彼のは今尚現はれてゐない Shakespeare の最良版であることは疑ふべくもなかった。

1769年、彼は Royal Academy に附属する古代文学の教授に任命されたが、然し次の仕事は Political Tracts といふ名称の下に四冊にわたる Tory 党のパンフレットを出版することであつて、それら四冊を一緒に発行した。それは1776年のことであつた。これによつても、彼が政治に関心をもつてゐることを語るに充分であつたであらう。

これより3年前の1773年に彼は1763年以来知り合ひとなつてゐる Boswell (James : 1740—1795) によつて、かの Hebrides に対する思ひ出の旅に出かけるやうにと勧められた。彼ら二人共に、自分らの体験記を残してゐて、Johnson の Journey to the Western Islands of Scotland (Boswell と共著) は1775年に現はれた。尚、これに加へて、旅行について言ふと、彼は1774年に、Thrale 家の人々 (1765年以來の知己) と North Wales に旅をし、そしてまた翌年・1775年に彼は彼らと Paris を訪問してゐる。

然し、彼はまだ彼の最大作 Lives of the [Most Eminent English] Poets 全10巻を書くことになつてゐる。それで、それら最初の4巻が1779年に現はれ、そしてその残り6巻が1781年に現はれたがこれは1905年に Birkbeck Hill によつて編輯された。掲載するところの伝記は総計52篇あつて、これらの中で、唯一篇 Young (Edward : 1683—1765) のそれは別人の手によつて書かれたものである。これは52人の詩人達に於ける性行と作品との關係に重点を置く大著であるが、まさにこの大著に於て、彼は自身が優れ秀づる学識をもちながら、いはゆる「学者」をもつて甘んずることをせず、また学問芸術の上に人生体験を置き、学芸と人生との接点に深く高い視野を得た。そして、あれだけの欠点があるにも拘らず、Lives of the [Most Eminent English] Poets は English criticism の最大なる記念碑として立ちつづけてゐる。

さて、彼はその他に、最初の著作 London (1739) [Juvenal の第三諷刺に倣つての諷刺詩]、Life of Richard Savage (1744) [Lives of the Poets の

中に編まれる]、The Rambler [1750—52、毎週2回発行、Spectator に準ず]、Literary Magazine (1756) [編輯]、The Patriot (1774) [憂国の精神を昂揚]、等々を編著して止まなかつた。然し、それに優つて、彼をしてその学識の高さと深さに於て、何人の追隨も許さぬのは、何と言つても、かの A Dictionary of the English Language [略して、D.E.L. としよう] で、あの編輯の妙味・あの内容の豊饒で、鬼神といへども、これに驚嘆させられてしまふであらう。我々は、各自の学習に於て、研究に於て、その受ける恩沢は無限、如何ほど、彼に感謝してもし過ぎるといふことはないであらう。

Johnson をして、大著 D.E.L. の作製に思ひを至らしめた契機或ひは環境は如何なるものであつたか。Lives of the Poets が発表されると、まづ世人はその優秀に驚嘆せしめられ、やがてまたロンドンの書店数軒がそのセンセーションに呼び醒まされ、やがて寄つて集つて、A DICTIONARY OF THE ENGLISH LANGUAGE [略して、D.E.L. としよう] の発刊を彼に懇請するところとなつた。そして、彼らは合議の結果、それら書店による企業団体 (syndicate) によつて彼の承諾を得ることになつた。それは1746年のこと、この時彼は1575ポンドを得た。そして、その翌年・1747年、彼は Fleet に近い Gough Square に居を定め、筆耕者6名を雇つて編輯を開始することになつた。

さて、Johnson が D. E. L. の編輯に當つて、主張堅持した信念は辞書編輯者たるものは、「言語の起源を探究し、その意義を詳説するに多忙無害な勤勉家」(a harmless drudge, that busies himself in tracing the original, and detailing the signification of words) であらねばならないといふことであつた。それで、資料となつたものは、先づ、Skinner, Etymologicon Linguae Anglicanae (1671)、Junius, Etymologicum Anglicanum (1743) 等を初めとして、尚この他に、例の出版者 Dodsley (1703—1764) の企画、Warburton (1698—1779) の編輯、Pope (1688—1744) の資料、等々を継承し、次に最も多大な範例となつたのは Nathaniel Bailey (? ~ 1742) の An Universal Etymological Dictionary (1721—27) であつた。そこでは、会話体の破格語文 (colloquial bar-

barism), 放縦な方言 (licentious idioms), 不規則な結合 (irregular combination) 等がきびしく警戒されてゐる。また、勿論、何処に於ても、grammatical purity の完成が見られ、すべての表現に貫徹が窺はれる。

さて、そのやうにして、彼の事業は出発したのであるが、然し、主体の Johnson はそれが容易ならざるものであることを痛感したので、彼は発刊の趣意書を伯爵 Chesterfield (1694—1773) に奉呈したところ、伯爵はその援助をにべもなく拒絶されてしまった。然し、Johnson は、それにも拘らず、病苦と戦ひ、貧困に耐へ、妻の病死に遭ひながらも、完成を一途の目標にして、奮闘努力をつづけてゆくのであった。

ところが、9年にわたる四苦八苦の末、1755年4月、春の訪れと共に、大著の公刊が成就発表されたのである。初版は二巻から成り、各巻は縦17インチ、横10インチ、厚3.5インチのものであった。ここに、一つの逸話がある。大著の完成いよいよ近しとの報が一たび伯爵の耳に入るや否や、その心は動き出し、援助の意をほのめかし始めたのである。然し、Johnson が今となつては、…… Is it not a Patron, my Lord, one who looks with unconcern on a man struggling for life in the water, and when he has reached ground, encumbers him with help? …… と伯爵の時効にかかった不誠意極まる援助に対する拒絶状を書いたのは、大著発刊二ヶ月前の1755年2月のことであつた。そして、この拒絶状が初めて公開になつたのは、伯爵の死後18年、Boswell の The Life of Samuel Johnson (1791) が出現した翌年のことである。

人の口に戸は立てられぬし、人の目に掩は掛けられないと同じやうに、この大著 D. E. D. の前に人の批評を否む訳には行かない。我々は、この大著にして、また Dr. Johnson の手になるものにして、尚且つ若干の誤謬、偏見、等々が存在するといふのである。その一・二を例示すると、

dispatch これが従来綴で、Johnson 自身も、かう綴つてゐるが、誤つて、despatch となつて、辞書に入つてしまつて、出版当時は尚一般に dispatch と書いてゐたが、1820年ごろから、次第に despatch が用ひられるやうになつた。校合の不足

がための誤謬か。

flour これはメリケン粉で元來は flower (花) と同語。ところが、Johnson はこの綴を認めず、flower の方に同義を与へてゐる。〔但し、1733年には、Cruden が<sup>あて</sup>區別を立てた。何か当推量のためか。

peacock < peacock, from the the tuft of feathers on its head (頭上にある羽毛の房から) 正しい語源は L. pāvō peacock + cok (cock) これも<sup>あて</sup>当推量のためか。

oats(からす麦) a grain, which in England is generally given to horses, but in Scotland supports the people. と訳されてゐる。Johnson の主観が強くここにさへ出てゐる。

然し、それらは所謂「米の中の粗」に過ぎない。その他、不備不満な点も若干はあらう。然し、「木を見て、林を見ず」(You cannot see the wood for the trees.) の愚は演じたくない。それかあらぬか、この大著以後100年間といふものは、誰一人これ以上に出て見せるわといふ者がなく、ただ Johnson に若干の改訂を加へるに過ぎなくて、今日に及んでゐる。また、アメリカでも Webster (1758—1843) による American Dictionary of the English Language (1828) が出るまで、D. E. L. は広く用ひられた。

☆

我々は、先づかの Tate Gallery にある Sir Joshua Reynolds によつて描かれた Samuel Johnson の肖像について、Physiognomical な立場から受ける印象を語ることにしよう。そして、それらの印象が彼の生涯とか思想とか事業とかに、どんな事実と合致なり、反撥なりをすることか、興味のあることである。

彼の全身は一方で精力にみちながらも、他方で何かしら、その哀愁を帯びた瞳は額の從皺と共に誠実なるが故の身心両つながらの苦難困憊を物語つてゐる。厚い唇は人情の温良、撫肩は平和と妥協とを愛するが故の忍耐、豊かな胸は雅量と大望とを擁する決意の剛直、太く逞しい手甲は回天の大事に挑戦も辞さぬ度胸等々が見受けられ、想像され、全体としては鈍重の中にも繊細な心理の底流が滔々と脈搏つてゐるといふ印象を与へてゐる。

る。誰が彼に渾名をつけたものか、bear (熊)といふのであるとか、外形的には適切であるが、死者を相手としない熊の特異な心理は Johnson の何処に当てはまるであらうか。尚、この他に、彼は Great Charm of Literature とか、English Socrates とか、Leriathan of Literature とか、の渾名もある。)それは、ともかく、我々の physiognomical な推測判定が彼の生涯とか思想とか事業とかに、果して正鵠を得てゐるか否か。

他方に於ては、実証的に彼の一挙手一投足を眺めると、既述の一々を裏附ける。彼は若い頃から一種の奇習奇行があった。飽くことを知らず、夜おそくまで、茶を飲むこと、夜遅くなつての時を愛好すること、衣服と奇妙な手振り・身振りに於けるダランないこと、漲る体力と勇氣、音楽と絵画とに対する鈍感、対話の喜悦、逆襲に於ける不思議な機敏、敵手を威嚇する闘心、虚偽な感傷の憎悪、不屈な誠実、古式な愛國心、教会に対する敬虔な服従、等々、一見相乖離する心理・行動は数へ上げれば限りがない。かういふ Johnson が当時すでにロンドンでは特異な地位を占めてゐたので、彼は自ら人心を収攬して余りあり、それに加へる健筆はいつしか彼を文学の泰斗にまで押し上げてしまつてゐた。

彼が1746年に D. E. L. の出版計画を発表したとき、その餓死せんばかりの状態にある人間が、それほどまでに巨大な、そしてまたそれほどまで不利な仕事を計画するとは実に逆説的な現象であつた。然るに、翌年・1747年に敢然と編集の開始に踏み切つた。周囲の耳目は豁然たるものがあつた。人をして啞然たらしむる事件は、まだ他にもあつた。

1759年・彼の50歳になつた年に、彼の母が90歳をもつて死んだ。そこで、彼女の死と関係あるそれら出費を支払はねばならなかつた。然し、相変らず、貧窮は彼を取り囲んでゐる。身動きが出来ない。ところが忽然として、名案が浮び上つた。それは何か一篇を著作することである。それは、例の The History of Resselas, the Prince of Abyssinia であつた。主人公 Resselas は Happy Valley の宮殿で、あらゆる娯楽機関を与へられてゐたが谷外の社会はきっと幸福にみちてゐるであらうと、秘かに飛行機を造らせ、これに乗つて、

高い山脈を越え、各地を巡つて、幸福を探したが、谷外社会は苦しみ多きを知り、人生で最大なる幸福を求めることが出来ないことを悟り、かの Happy Valleyこそ無上の楽天地であることを知り、再び宮殿に帰つて幸福に生活した、といふ筋であるが、Johnson はこの寓話をたった一週間で書き上げ葬儀費用一切を賄ふことが出来た。これも、Johnson の底力といふか、凡人の意表に出る事件であつた。〔Abyssinia は今日の Ethiopia である。〕

1758年、彼 Bear は例の The Idler に自分の肩書を採用し、定期刊行物文を企画し、これら幾年かの間に、彼はまた多くの下働き仕事も完了したが、それらの努力にも拘らず、一度ならず、多くの借財によって、逮捕される Bear となつた。然し、つひに1762年、彼は毎年銀貨300ポンドの授与をされることによって、最後の22年間を比較的富裕な状態で生活することが出来た。

さて、渾名「文学のソクラテス」に相応はしく、彼は人に「好き嫌ひ」があつた。例へば、David Hume (1711—76) を悪み、Adam Smith (1723—90) を嫌ひ、Thomas Gray (1716—71) は雅び過ぎると評し、Thomas Warton (1728—90) を極度に Romantic だと貶し、F. M. E. Voltaire (1694—1778) を自由すぎると咎めることに出でゐる偏見・嫉妬・羨望・蔑視などよばれるものである。

然し、Johnson は自身に対しても公平を失はず、その弱点を認め、貴族と奴隷とを一視同仁、弱者の味方、清貧に甘んじ、柔和にして諸諺に富み、信仰は正統派に属し、真摯な道徳的態度を持して一代の師表と仰がれるなどで、つひに彼はイギリス国民の理想的な人物と仰慕されるに至つた。

彼は都会生活を好み、ロンドンは愛着の中心となり、偶々子なく妻に死に別れてからは孤独を恐れ、人混みに立ち入ることを好み、カフェーとかバーとかで、友人達と対話をするが多くなり、それには当代一流の人士も顔を出すやうになつたので、1764年に、発起人の一人として the Literary Club を創立し、毎週一回ソホー地区・ジェラード街の Turk's head に会合し、文学・人生・芸術を論じ合ふのであつた。それら論客の中、有名な面々を挙げると、政治家 Edmond Burke (1729—97)、肖像画家 Sir Joshua Reynolds (1723—92)、作家

Oliver Goldsmith (1728—74), 弟子 David Garrick (1717—79), 政治家 C. J. Fox (1749—1806), 弁護士 J. Boswell (1740—95), 歴史家 E. Gibbon (1737—94), 等々で、少しく後れて、詩人・文学者 T. Warton, sr. (1688—1745), J. Warton, jr. (1722—1800) が加った。そして、彼らの中で、Reynolds は Johnson の肖像を描き、所謂写真のない時代に、克明な筆致をもって Johnson を残し、彼を偲ぶに唯一の貴重な手懸とならしめ、Boswell はスコットランド嫌な Johnson を引き立て、故郷スコットランドを旅させて、共著ながら、不朽の名著 *A Journey to the Western Islands of Scotland* (1775) を公にした。

尚また、もう一つの逸話がある。恐らく、1765年のこと、例の Club が結成され、これが原因となって、彼は醸造業の Mr. Thrale とその陽気な妻 Hester との知己を得、そしてそれから18年間にわたる親交を保ち、ヒポコンデリーに襲はれると、ロンドンと彼らの田舎にある Streatham Place の快適な邸宅で、客として多くの時間を勧談に旅行にと過し、その奇習も柔げられた。

ところが、Johnson は秘かに romantic な思ひを Hester (1741—1821) に寄せてゐた。ところが、1781年4月に Mr. Thrale が死んで、その翌年・1784年7月 Mrs. Thrale (Hester) は家業を廃して、イタリアの音楽家でカトリック教徒の Piozzi に心傾き始めたので、Johnson は身心共に瘦せ始めた。彼らの結婚は1784年7月に行はれた。二人はフランス・イタリー・ドイツ・ベルギー等々を巡り、1787年にイギリスへ、1790年に Streatham に、戻った。然し、Mrs. Piozzi (Hester) が Clwyd のほとりに Brynbella を建てて間もなく、Mr. Piozzi は1809年に死んだ。Mrs. Piozzi (Hester) は70歳過ぎた時、William Augustus Conway に感傷的な愛情を抱いたが、1821年5月2日に、脚を折って死んだ。

彼女は活発で、率直で、機智に富み、beautiful (優麗) とまでは行かぬまでも、チャーミングで、可愛かった。彼女は詩を作り、*Anecdotes of Dr Johnson* (1786) とか *Letters to and from Dr Johnson* (1786) とかも書いた。これらは Johnson を知る上で、甚だ貴重な史料ともなっていて、今日まで再三にわたって、刊行されてゐる。

1783年、Johnson は中風の襲来を受けた。彼は或る程度まで、元気を回復した。然し、その翌年・1784年、水腫と喘息とが重なって発生した。晩秋も終りに近づいた11月までには、老体 (75歳) のことでもあって、回復の見込はない。彼はつひに死んだ。生・老・病・死——さすがの Bear Leviathan も、これらには打ち勝てなかった。そして、彼は、前述の如く、Westminster 大寺院に葬られたのである。時まさに極月13日のことであった。

☆

とにかく、かうして「文学の偉大な珠玉」(Great Charm of Literature) は生れ、育ち、貧し、苦し、作り、侮られ、語り、躓き、倒れ、恋し、病み、その他諸々の苦難と闘ひつつも、母国語を愛し、守り、伝へて、不朽の名著たらしめた功績は、これを目に留めただけで、驚嘆これ久しうするばかりではなく、一たびこれを繙くならば、如何ほど感謝しても感謝しすぎるもののないのを否認ないであらう。彼を称して、「文学の偉大な珠玉」とは誰の仕業であったか。宜なるかな! Vernacular English の生き且つ語られ且つ書かれる限り、珠玉の光輝は久遠に消えぬであらう。

1984年4月14日——